

提言HJハンドの紹介

本好きな子どもに育てる

私の家族に五歳になったばかりの男の子がいる。一人っ子なのでわがままで三歳のころから絵本が好きで、わが子供の好きな虫や動物の描いている「はるの図鑑」を見せたら、すっかり気に入って何回も本棚から取り出して見るようになった。小さい図鑑であるがよく編集されていて、大人が見てもおもしろい。その後はもちろん夏、秋、冬と季節に応じて勝手に本棚から取り出して見るようになり、「これは何?」「これは?」とうるさく質問してきたが、五歳になったころから、必要に迫られてかいつの間にか字を覚え、今ではウルトラマンと戦う怪獣の名前も自分で読めるようになっていた。

私も本好きで、大人になっても福音館の子供の友全集や日本昔話玉川子供百科等が本棚に置いてある。彼の母親も本好きで、村の図書館に行き、一緒に本を読んでくらしらしい。「そこに本があるから読む」まさに幼児教育の目標である「子供は環境によって育つ」であると思う。

伝統文化を継承しましょう

【提言エピソード4】

東村には数多くの伝統文化の行事がありますが、現在はほとんど行われていない現状にあります。坂口、八内、石原で行われていた「五合飯」は、各集落の青年が宿回りを実施してまいりました。毎月旧暦の24日に青年は各々五合の米を持ち寄り、飯を炊いて食べ、愛宕神社に参拝して水の確保と五穀豊穡をお祈りする古い行事であります。

また、下野出島の鎮守鹿島神社に奉納する御神楽は、祭礼は勿論、村の各行事等においても披露され、他市町村の祭礼等にも招かれ奉納してまいりました。

神楽は、現在80歳代の衆士が初代で、60歳代、40歳代と継承され、その後は、中学生、小学生へと続いてきましたが、今は、若人が少なくほとんど行われておりません。村内の伝統文化の行事は皆同様であります。私たちが生活していくには、古き良きものを継承して、新しいものを創ることが最も大切なことだと思います。特に、若い人たちは、積極的に伝統文化を継承し、子弟にも参加を促して、これを守ってくださるようお願いいたします。

【提言エピソード5】

・太陽の国に行って思ったこと・

釜小学校6年 菊地なつみ

私たち6年生は、太陽の国老人ホーム「やまぶき荘」を訪問しました。やまぶき荘には100人のお年寄りがいるそうです。そのうち、4分の3の人が足が不自由で車いすに乗っていると聞いて驚きました。私たちの合奏や合唱などの発表の後、おばあさん4人とおじいさん1人とカルタ遊びをしました。とても楽しかったです。そのとき、楽しそうにゲームをやっているおじいさんやおばあさんを見て、本当はさびしいんだなと思いました。おじいさんやおばあさんは、ここに来たくて来ているのではないと初めて実感しました。もう一つ思ったことは、私の家にいるじいちゃんとおばあちゃんは、とても幸せだということです。それは、家族がすぐそばにいるからです。

私は、家のじいちゃんとおばあちゃんを、これからも大切にしながら、1日1日を過ごしていきたいです。



(やまぶき荘訪問)

助け合い笑顔求めて

今日は、ボランティアの日。お昼までに弁当を老人宅に届けるのです。なんと、お年寄りが外に出ているのを発見。寒さが身にしみるだろうに、車を運転しながら大丈夫か不安になりました。大丈夫、笑顔で会話はずみです。

高齢化が進む中で、お年寄りは精神的肉体的苦痛を感じて生きている人が多いのではないかと思います。安心して楽しく暮らせるためにも助け合いが大切だと考えています。東支部では家事援助も年間を通じて行っていますが、一人暮らしや苦痛を感じている人は、特に老いを感じれば感じるほど、人の温もりが身にしみるのでないでしょうか。よい人間関係をもって、共に生きる喜びを味わいたいものです。

このボランティア活動を通して、「光り輝く存在」になるよう、さらなる活動に力を注いでいきたいと思えます。

心と心をつなぐあいさつ

あいさつは、おぎなりの通り一遍では、お互いの心と心が開いたとはいえないと思います。良いあいさつは相手の心に自分の気持ち伝わることではないでしょうか。

過日、東村東光学園(高齢者学園)の学習会が開催されたときのことです。村内各地から学園生が続々と集まってきました。何日かぶりに会う学園生は、知人友人を見つけると笑顔で「おはようございます。」「しばらくでした。」「元気でなによりです。」「と、言葉は異なるが、心の通ったあいさつを見聞して心温かくなるのを感じました。こんなに心の通ったあいさつのできる学園生は、数多くの友と仲良く楽しく協力し合っ

て学習や運動に参加しています。だから生きる喜びをかみしめているのだと思えました。

各家庭の生活の場で夫と妻、祖母、子供が朝起きたとき、お互いに「おはよう。」と笑顔であいさつを交わすことで、家の中が明るく、なごやかな雰囲気になり、夫婦、親子の絆が強まり子供たちも生き生きと育っていくのではないのでしょうか。